

(2) 海にまつわる伝統行事にみる歴史的風致

鶴岡八幡宮の上宮に続く石段を上り背後を振り返ると、南に向かって真っ直ぐに伸びる若宮大路と扇形に広がる市街地、その先に相模湾の水平線を見下ろすことができる。

古都保存法において「古都」と定められている10市町村のうち、海浜を有する都市は鎌倉市とその南東に位置する逗子市のみであり、緑豊かな自然環境、貴重な歴史的遺産と併せて海浜の風景が広がっていることで、鎌倉は古都の風格を保ちながらも開放感が漂い、訪れる人々に親しみを感じさせている。

鎌倉において、海にまつわる歴史を語る上で欠かせないのが、中世に建造された和賀江嶋である。和賀江嶋は、鎌倉の市街地に沿って弓なりに約2km続く鎌倉海岸（材木座から坂ノ下）の東端に位置しており、日本に現存する最古の築港遺跡として史跡に指定されている。

島は陸部から東西方向へ約240m、幅100mにわたって延びており、その形は直径40～50cmの玉石を積み上げた築堤の様を呈し、陸部に横たわる巨大な岩石上には大正13年（1924年）に鎌倉青年団が建立した史跡顕彰碑が見える。

古くからこの海岸は、和賀江又は和賀江津と呼ばれており、鎌倉幕府直轄の港として栄え、和賀江を含む湾には数百艘の船が常に碇泊していたといわれている。しかし、大風による破損や転覆が多く、海岸が遠浅のため荷の揚げおろしに極めて不便であったことから、勸進聖人往阿弥陀仏が船着場建造の必要性を幕府に説き、第三代執権北条泰時を中心として幕府がこれに協力した。貞永元年（1232年）7月1日に着工し、8月9日に完成した和賀江嶋には、その後、関が設けられ、極楽寺が関米（税）を徴集して和賀江嶋の修築、維持管理を行うこととなり、中国や国内各地と文物や人の交流が行われる海の玄関口



写真2-50 市街地を上空から望む



写真2-51 和賀江嶋(昭和36年(1961年))



写真2-52 夕暮れの和賀江嶋(現在)



写真2-53 史跡顕彰碑と和賀江嶋

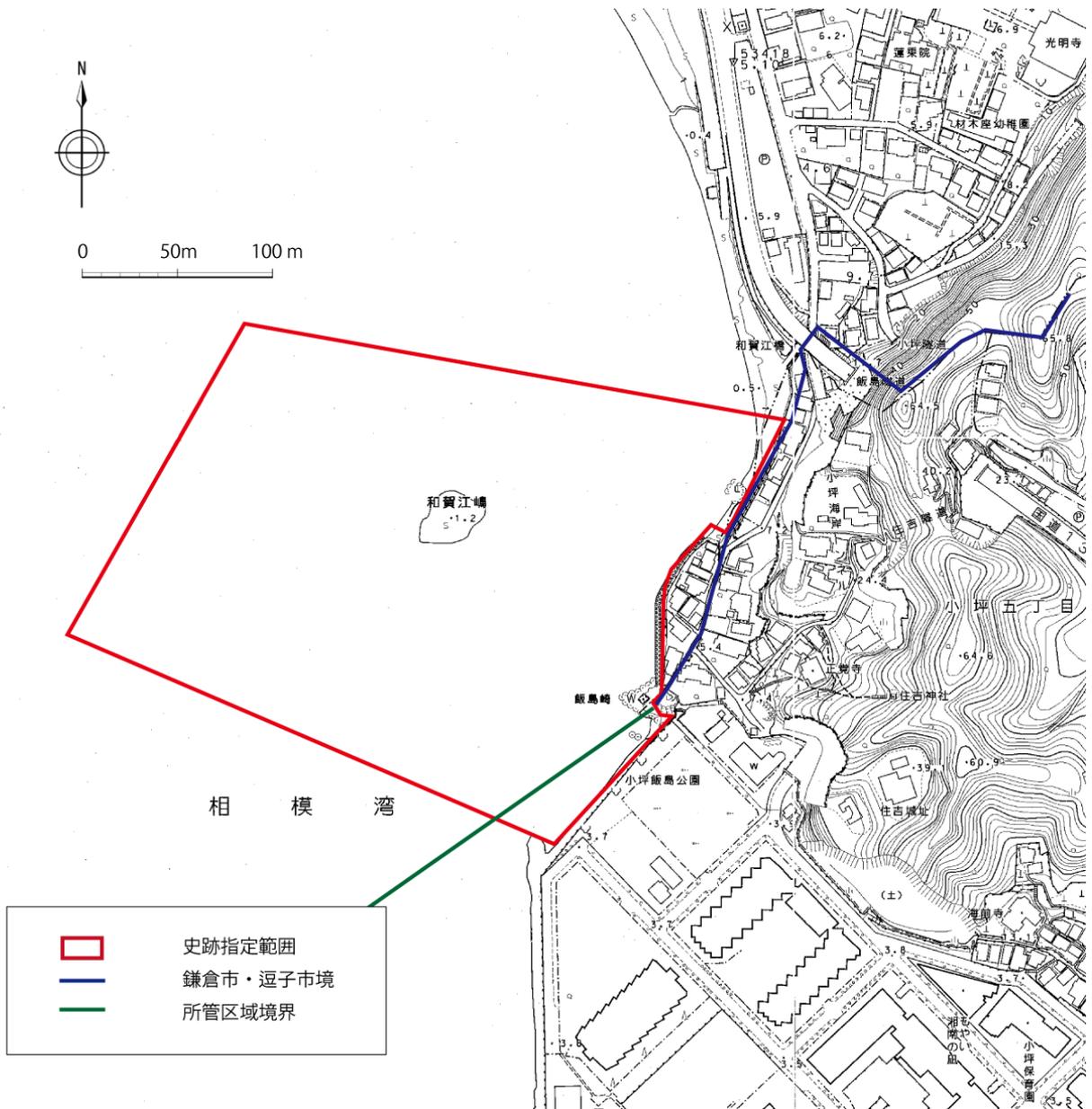


図2-8 史跡和賀江嶋指定範囲図

としても中世都市鎌倉の発展に重要な役割を果たした。

遠浅の浜辺に積まれた玉石が大潮の干潮時に全容をあらわし、漁船が係留されているその風景は、史跡和賀江嶋が往時港であったことを想起させる。

江戸時代に入ると、和賀江嶋が位置する材木座とともに、坂ノ下、腰越、片瀬（藤沢市）、江ノ島（藤沢市）、新宿（逗子市）が「鎌倉六カ浦」と呼ばれ、日本橋の^{しんさかなば}新肴場附属の漁場として徳川家康の入国以来種々の御役（義務）を勤め、その対価として人々は漁業権を保証された。

中でも江戸城をはじめ、藤沢宿、戸塚宿などに魚を献上することが最も重要な役であり、特に有名であった鰯は、鎌倉に水揚げされるとすぐに六丁^{ろくちょうろ}櫓の早舟で江戸などに急送された。松尾芭蕉が「鎌倉を生きて出でけん初鰯」、山口素堂が「目には青葉山ほととぎす初が^{やまぐちそどう}」

つを」と詠んだことから、当時、鎌倉の鰹がいか
に人々に愛好されていたかが分かる。こうした沿岸漁業
は、近世以降、地域の活力ともなる生業として営まれ、
現在は海産物の加工・販売なども含めた水産業として
引き継がれている。

鎌倉海岸を拠点とする漁業者は、主に小型定置網、刺
網、しらす船曳網、みづき、わかめ養殖などの沿岸漁
業を行っている。

このうち、わかめ養殖は11月初旬に筏いかだを設置して
種糸を植込むところから始まる。採捕は2月初旬～3
月末までで、釜ゆで、水洗い、天日干しの順に2日か
けて行う。浜で湯がいて干すのが特徴で、天日干しの
風景は冬の風物詩となっている。

また、いわしの稚魚として知られるしらすについ
ても、生しらす・天日干し・釜揚げしらす・タタミイワ
シとして加工し、直接販売する方法を殆どの網元が行
っている。

鎌倉海岸は、海が遠浅で漁港がないことから、砂浜
に漁具倉庫を建て、漁を終えるたびに滑車などを利用
して漁船を砂浜まで引き上げている。このため、砂浜
には漁を終えた漁船が並び、近世から営まれてきた沿
岸漁業が今も続いていることを伝えている。

これに対して昭和39年(1964年)10月に開港した
漁港を持つ腰越の漁業者は、定置
網、刺網、しらす船曳網、一本釣
り、採貝藻等の沿岸漁業を行なう
とともに、わかめ養殖のほか、サ
ザエ、マダイ等の種苗放流を継続
的に実施するなど、作り育てる漁
業を推進している。

漁業に関連した生業を営む人々が
住まう材木座、坂ノ下、腰越には、
網元や船宿、鮮魚店の他、のりな
どの海産物の販売店、新鮮な海の

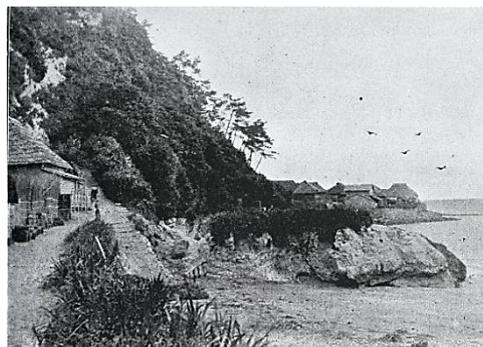


写真2-54 材木座漁師町(明治時代)

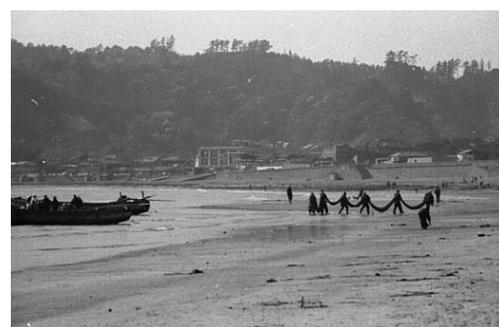


写真2-55 材木座での漁業
(昭和36年(1961年))



写真2-56 わかめ干し

表2-4 主な漁業と漁期

時期	漁法
3月11日～12月末	しらす船曳網漁業
10月～4月	わかめ養殖(筏)漁業
11月～4月	みづき漁業
1月～12月	定置網漁業
1月～12月	たこつぼ・籠漁業
1月～12月	刺網漁業
1月～12月	一本釣り漁業
1月～12月	遊漁案内業

幸を使った料理を提供する飲食店などが軒を並べ、大通りから外れた路地には、漁師町の面影を残す昭和期の木造住宅等が点在している。こうしたまち並みを背景として、古くから漁業が生活に根付いているこれらの地域では、海に関連する様々な伝統行事が営まれている。



写真2-57 坂ノ下のまち並み
(路地)



写真2-58 坂ノ下のまち並み
(海を臨む)

ア ^{ふな}船おろし(船祝い)

新年になって初めて海に漁船を出す日に行われる「船おろし(腰越地区では船祝い)」では、漁師たちが海岸へ出向き、大漁旗に飾られた漁船を勢ぞろいさせ、船を守る神様である「船霊さま」^{ふなだま}に大漁と安全を祈り、日ごろの海へのお礼と大漁への願いを込めて、船主がそれぞれ船の上から海の方へミカンや菓子をまく。材木座と坂ノ下では毎年1月2日10時頃から、腰越では毎年1月4日8時頃から始まるこの行事には、地域の人々の他にも、市内各所から大勢の見物客が集まり、船の上からまかれるミカンや菓子などの縁起物を受け取ろうと手を伸ばし、方々から歓声があき上がる。



写真2-59 船おろし(材木座海岸)



写真2-60 船祝い(腰越漁港)

イ 汐まつり

1月11日の「汐まつり」では、材木座地区の海岸において、「潮神楽（鎌倉神楽、湯立神楽）」の奉納と「ドンドンヤキ（ドンドヤキ、左義長）」と呼ばれる正月のお飾りを焚き上げる行事が行われる。

当日は波打ち際からやや上がった砂浜に^{ござ}莫藪を敷き、四方に笹竹を立てて注連縄を張り、海に対面して魚や野菜、お神酒などを供えた祭壇を設け、祭壇の隅にカマドを置いて神楽で使用する湯を沸かす。併せて祭場に隣り合う西側の平地では、ドンドンヤキの準備が始まり、正月飾りやだるまを納める場所として四方に笹竹が立てられ、集まった人々は用済みとなった正月飾りなどを笹竹の内側に高く積んでいく。

全ての準備が調い、関係者が席につくと、神事に先立ち天王唄保存会によって天王唄が奉納される。この天王唄の発祥は定かではないが、鎌倉時代、源頼朝が鶴岡八幡宮を建造・再建するための材木を伊勢から和賀江嶋に陸揚げする時、伊勢から来た人々が歌っていた仕事唄が天王唄として残ったと伝えられている。揃いの法被^{ほっぴ}を着た保存会の面々が祭壇の先の海を臨んで座り、声をそろえて天王唄を奉納し終わると祭儀が始まり、神職による祝詞奏上、関係者による玉串奉納に続き、いよいよ神楽が始められる。

鎌倉神楽は笛、太鼓で音頭を取りながら、打囃、初能、御祓、御幣招、湯上、中入、搔湯、笹舞（湯座）、弓祓（射祓）、剣舞毛止幾の演目が進められ、祭儀が終わると、すぐにドンドンヤキが始められる。

祭儀を終えたばかりの宮司が、積み上げられたお飾りの山の前に立ち、湯釜の火を遷して火を点け、お焚き上げを行う。火は点火された下部から上部へと燃え移り、その周りを取り囲む人々は皆、一年の無病息災や家内安全を願いながら、煙が高く上がっていく様子を見守っている。

「潮神楽」、「ドンドンヤキ」は、ともに^{みだればしむら}乱橋村の二社（八雲・金毘羅）と材木座村の二社（^{みるめ やつざか}諏訪・視女八坂）が、村社となった三島社に合祀された神社である五所神社の行事として執り行われているが、元々は漁師が主催する大漁祈願の儀式であったと伝えられており、現在では漁師の数が減ったことなどから、主催者は五所神社の氏子役員となっている。

なお、同日同時刻には坂ノ下海岸においても神事が行われ、神楽が奉納される。また、腰越地域の小動神社では、1月16日の例祭において「鎌倉神楽」が奉納される。



写真2-61 潮神楽(材木座海岸)



写真2-62 ドンドンヤキ(材木座海岸)



写真2-63 汐神楽(坂ノ下海岸)

ウ 五所神社例祭

6月の第2日曜日に行われる五所神社の例祭においては、神輿の海上渡御が行われる。

猿田彦や手古舞の少女たち、お囃子山車等の前導で3基の神輿が五所神社を出発し、材木座のまちを練り歩く。このうち三番神輿については、白張烏帽子姿の氏子達が「天王唄」を歌いながら担ぐ。

光明寺の入口にて化粧直しを行い、材木座海岸に到着すると、四方に竹を立てて注連縄を廻らせた所定の位置に3基の神輿を据え、神幸所祭が行われる。祝詞があげられ、神輿、参集者の祓い、海へ向っての祓いが行われた後、三番神輿を残して残りの2基が海へと向かい、神輿渡御が行われる。2基が海から浜に戻ると、3基がそろって五所神社へと帰っていく。



写真2-64 五所神社例祭

エ 小動神社天王祭

小動神社は八王子宮はちおうじのみや、八王子大権現だいがんげんなどと称されていたが、明治の神仏分離に際し、地名の小動をとって社名を小動神社と改称した。「八王子宮縁起」によれば、文治年中（1185～1189年）に佐々木盛綱が平家追討中、備州児島の戦いにおいて神のお告げを夢の中で感じ大勝したことから、お礼参りのために長く尊崇してきた八王子宮を勧請したことが起源といわれている。また元弘3年（1333年）5月、新田義貞が鎌倉攻めの折に戦勝を祈願し、後に祈願成就のお礼として剣一振に黄金を添えて寄進したことにより社殿が再興されたことから、新田義貞の功績を大いに称えている。

小動神社天王祭は、一般に「天王祭」と呼ばれており、7月7日・14日の両日にわたる祭礼だが、近年は14日に近い日曜日に行われている。神事は、7日に近い日曜日の夕方に氏子五か町（浜上、神戸、土橋、中原、下町）の囃子屋台が小動神社に集まり、総代及び祭典委員等が参列の上、神幸祭を執り行う。その後、出御、囃子屋台さいせんからびつ、賽銭唐櫃所後、神主、総代、神輿の順に行列を組んで氏子区五か町を練り歩く。午後7時には神社参道に設けられた御仮屋前に到着し、関係者一同による手締めの後、各町囃子屋台は解散し各々の町内へ帰り、神輿は御仮屋内に安置して神幸祭を終える。

翌週日曜日の還幸祭かんこうさいでは、江島神社の末社の八坂神社の神輿との行合祭が行われる。早朝から腰越町の花番（その年の当番）と下番（前年の当番）に当たる2町内の総代、祭



写真2-65 神輿(小動岬付近)



写真2-66 神輿(満福寺付近)

典委員、囃子屋台が迎いの使いとして江の島に出向する。小動側は御仮屋前に各町の囃子屋台が集合し、総代、祭典委員、各町内代表が参列して御動座祭を執り行った後、町内を練り歩く。行列は、各町の囃子屋台、獅子頭、大榎、触れ太鼓、賽銭唐櫃、神主、総代、神輿の順となる。一行は先ず浜上海岸に出て、四方に立てた竹に注連縄を廻らした所定の位置へ神輿を据え、神幸所祭を執り行う。祝詞奏上、御幣にて総代、祭典委員、参集者を祓った後、海に向い大きく祓う。そして、再び同行列は各町を練り歩き、下町海岸へと至り、同じく四方に立てた竹に注連縄を廻らした所定の位置へ神輿を据え、神幸所祭を執行する。次いで神輿は海の中まで担がれ、少しの間激しく揺さぶられた後、海から上がり引き続き町内を練り歩き、昼休憩を挟んで龍口寺前で八坂神社の神輿を出迎える。

江の島側の一行は、島での行事を済ませ、腰越側からの使者の迎えを待って、花番、下番の先導で金棒、高張り、通り囃子などの各囃子に太鼓、五所幟、提灯、天狗、神輿、総代、宮司等による行列を組んで腰越に入る。神輿が小動神社御仮屋前の祭庭に到着すると、両社の神輿が並んで据えられ、腰越側が準備した神饌を備え、神幸所祭が行われる。少しの休憩を挟んで再び一行は動きだし、夕刻に差し掛かった龍口寺の前で、腰越側の一行は横列に並び、江の島側の行列を見送る。この後小動の神輿はもと来た道を引き返し、一通りの神事を終えた後、役員一同の手締めで祭礼は終了する。

以前は、各町から飾り人形付きの山車5台が勢揃いして運行するため、道路上を走る江ノ電の架線は取り外され、電車は祭典終了まで折り返し運転を行っていたが、昭和37年(1962年)に山車が消失したため、この運行は無くなった。現在では、人形を各町の神酒所に飾って往時の面影を偲ばせているが、人形は浜上が義経と弁慶、神戸が八幡太郎義家ごしょごろうまると鎌倉権五郎景正、土橋が源頼朝と御所五郎丸、中原がスサノオノミコト、下町が神功皇后たけうちのすくねと武内宿禰である。

オ 石上さま例祭

7月の海の日には、坂ノ下にある御霊神社の境内の一角に祀られている「石上さま」の例祭が行われる。

御霊神社は、海岸と並行に東西方向へ走る星の井通りから「力餅家」の角を曲がり、参道を進んだ山際にひっそりと佇んでいる。

星の井通りは、かつての鎌倉街道の一部で、江の島に通じる主要な道路であり、その一角には古い石の道標が残る。道標の正



写真2-67 石の道標



写真2-68 力餅家

面には、この場所が御霊神社への入口であること、側面にはこの道が長谷観音（長谷寺）へ続く道であることが刻まれており、力餅家はその横で、元禄年間（1688～1704年）から営みを続けている。「力餅家」というのれんを目印に星の井通りを曲がり、今は住宅に挟まれた参道を進むと、御霊神社鳥居の手前に江ノ電の踏切が見える。梅雨の時期になると線路際に紫陽花が咲き誇り、紫陽花と江ノ電、鳥居が組み合わせさった情緒ある風景に多くの来訪者がカメラを構える。



写真2-69 鳥居前の踏切

踏切を渡り境内に入ると、入口に明神鳥居、入口東側に社務所と宝物庫、階段を上り奥中央に銅板葺権現造の社殿、それを挟むように東側に末社群、西側に神輿舎二棟がある。社殿は明治45年の改築、大正3年の竣工で、腰越の大工棟梁によるものであるが、覆屋内の本殿は、貞享4年（1687年）の棟札がある。本殿の周囲には「かながわの銘木100選」に選定されたタブの木をはじめ、緑が生い茂り、社殿の裏に切り立つ崖が鎌倉特有の境内空間を形成している。



写真2-70 石上神社

例祭の当日は、先ず御霊神社の境内に神輿を安置し、白い和紙の御幣を赤飯に立てた「ゴック（御供）」と神酒を供え、神事が執り行われる。次いで神輿は浜に運ばれ、再び神事を行った後に船へと移される。神輿と神職を乗せた船は、囃子方を乗せた漁船を従えて沖へと向かい、さらにゴックを片手に掲げた一人の若者が、十人前後を従えて船の後を泳ぎ追って行く。この一団が1km程沖合の石上神社に祀られた岩礁のあった場所に到着すると、神職が祝詞を奏上して榊を海へ投げ入れ、これを合図に泳いでいた者たちが、一口ずつゴックを食べた後、残りを海神に供えることで船の安全を祈願する。



写真2-71 神輿と御供



写真2-72 沖へ向かう神輿



図2-9 御霊神社境内図

カ 面掛行列

実りの秋を迎える頃になると、御霊神社では、鎌倉権五郎景政の命日である9月18日に「面掛行列」が行われる。この行事は、地域の豊年と豊漁を祈願し子孫繁栄を願う祭で、神奈川県指定無形民俗文化財にも指定されているほか、「面と衣装（四五点）」と「神輿」は市指定有形民俗文化財に指定されている。御霊神社の創建年代は明らかではないが、平安時代後期と推定される。

9月18日当日は、面掛行列の前に「例祭」が執り行われ、「鎌倉神楽（湯立神楽）」が十二座、奉納される。神楽の基本的な構成は汐神楽と同じであり、社殿東側の平場に青竹を四方に立てて注連縄を張り、五穀豊穡を祈って神楽が奉納され、その後、面掛行列が始まる。

御霊神社の面掛行列の起源は定かではないが、さがみのくにふどきこう「相模国風土記稿」に「例祭九月十八日巡行ノ儀アリ。祭祀ノ式鶴岡ノ巡行ノ式ニ倣ヘリ。祭器モ鶴岡ノ神器ニ模倣シテ造レリ」とあり、また、面裏の「明和五戌子年」の年代からも、200年以上前には行われていたことが明らかである。

神社と氏子の結びつきが強く、町内の氏子は祭の時に一軒で一役を受け持ち奉仕するしきたりがある。

行列は同心・金棒を先頭に、囃子連、幟、神宝類、猿田



写真2-73 鎌倉神楽(御霊神社)



写真2-74 猿田彦

彦、獅子頭が列をなして歩き、その後を爺、鬼、異形、鼻長、翁、烏天狗、福祿寿、火吹男、阿亀、女の面の10人と神輿が行列を成し、ゆっくりと歩を進めていく。この内、妊婦役の阿亀のお腹は、豊年・豊漁の象徴として大きく膨らんでいる。

最後の2人は女装であるが、全て男性が扮しており、前の8人は揃いの頭巾に赤い袴姿で、着物の上に赤や金の美しい模様が入った袖なしの羽織を着ている。阿亀は、大きくふくらませたお腹を両手で抱えながら歩き、産婆役の女が阿亀の腹をなでたり扇であおいだりと、おどけた動きをして見物人を笑わせる。この他、赤の狩衣かりぎぬに黒烏帽子の宮司、うす紫やうす茶色の狩衣すげがさに黒烏帽子の神職達、そして、袴姿で白足袋を履き、菅笠をかぶった役員などを供とした行列がゆっくりと移動していく様は、往時の人々の願いが営々と続いていることを表している。

面掛行列は、奈良時代に盛んであった仏教布教のための仮面劇である「伎楽」の面を用いて演じられるが、伎楽はその後衰退したため、現在伎楽の面を祭礼に用いる例は全国的に類を見ない。宝物館に保管されている市指定文化財の面には、明和5年(1768年)の年号があり、鶴岡八幡宮の祭りで「放生会」を行ったときに、舞楽面の行列があったものをまねて、坂ノ下村民が作らせたものだといわれている。その後、鶴岡八幡宮の行列は、江



写真2-75 (左から)火吹男、阿亀、女、福祿寿



写真2-76 面の10人

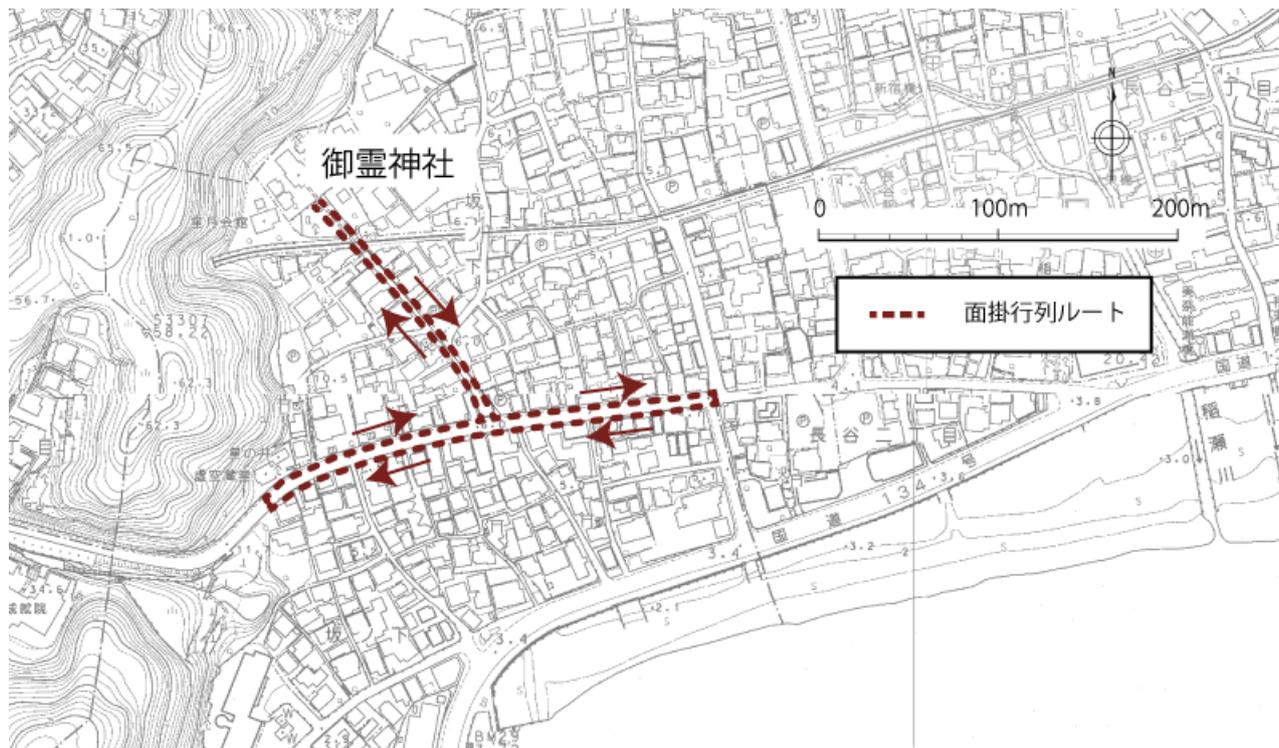


図2-10 面掛行列ルート図

戸時代の終わりに面が焼失したことをきっかけに行われなくなった。また、山ノ内の八雲神社にも裏に天保11年の銘がある面が残り、市指定の有形民俗文化財となっているが、こちらも現在行列は行われていない。このことから、御霊神社の面掛行列は大変貴重な文化財といえる。

なお、面掛行列の一行は、平成20年(2008年)に大韓民国の安東市で毎年開催されている「安東国際仮面舞フェスティバル」へ参加するなど、伎楽についての理解を深める活動も積極的に行っている。

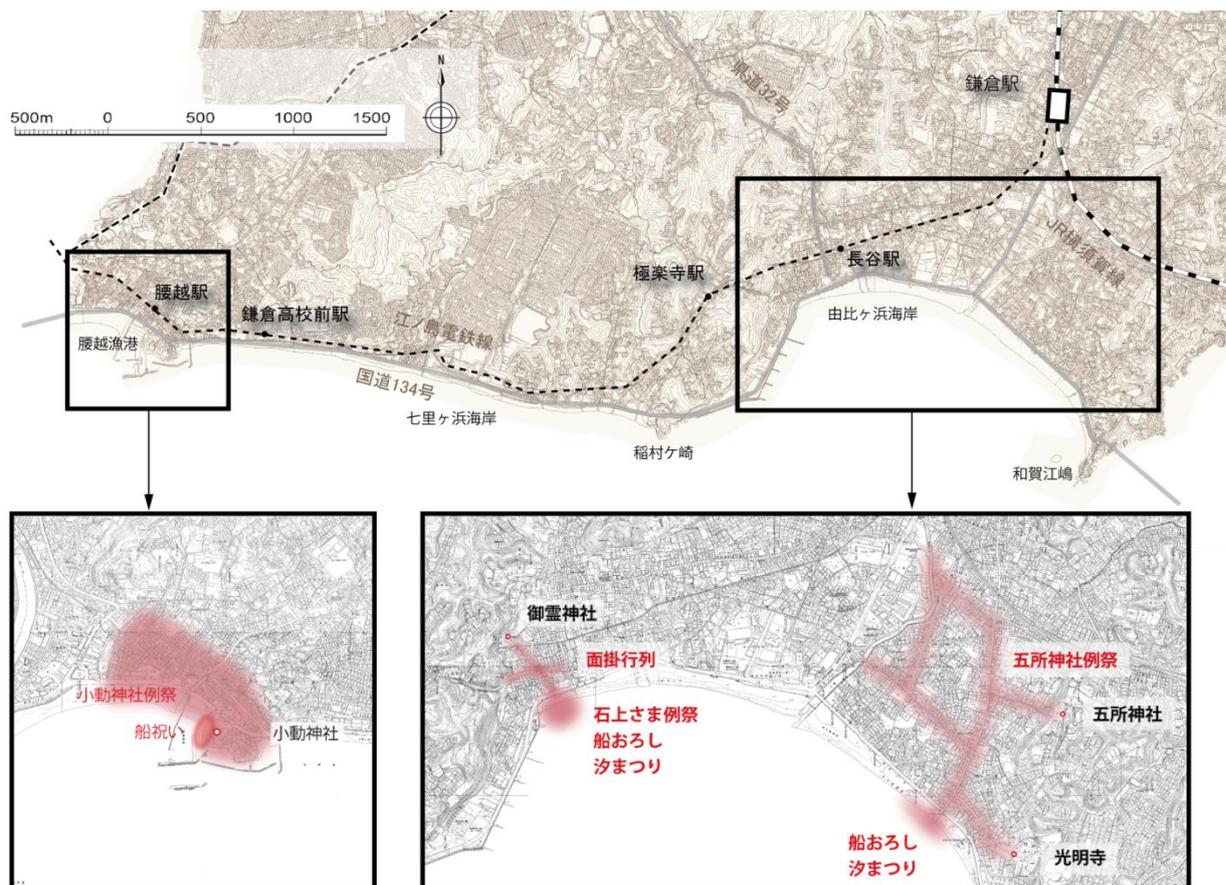


図2-11 海にまつわる伝統行事の市街地への広がり

このように鎌倉の海浜地域においては、沿岸漁業などの生業とともに、古来神社仏閣との関わりの中で漁の安全や豊漁を願う伝統行事が脈々と受け継がれており、地域の内外や訪れた人々との交流を図るなど、鎌倉の海と共生してきた人々の営みを随所に見ることができる。

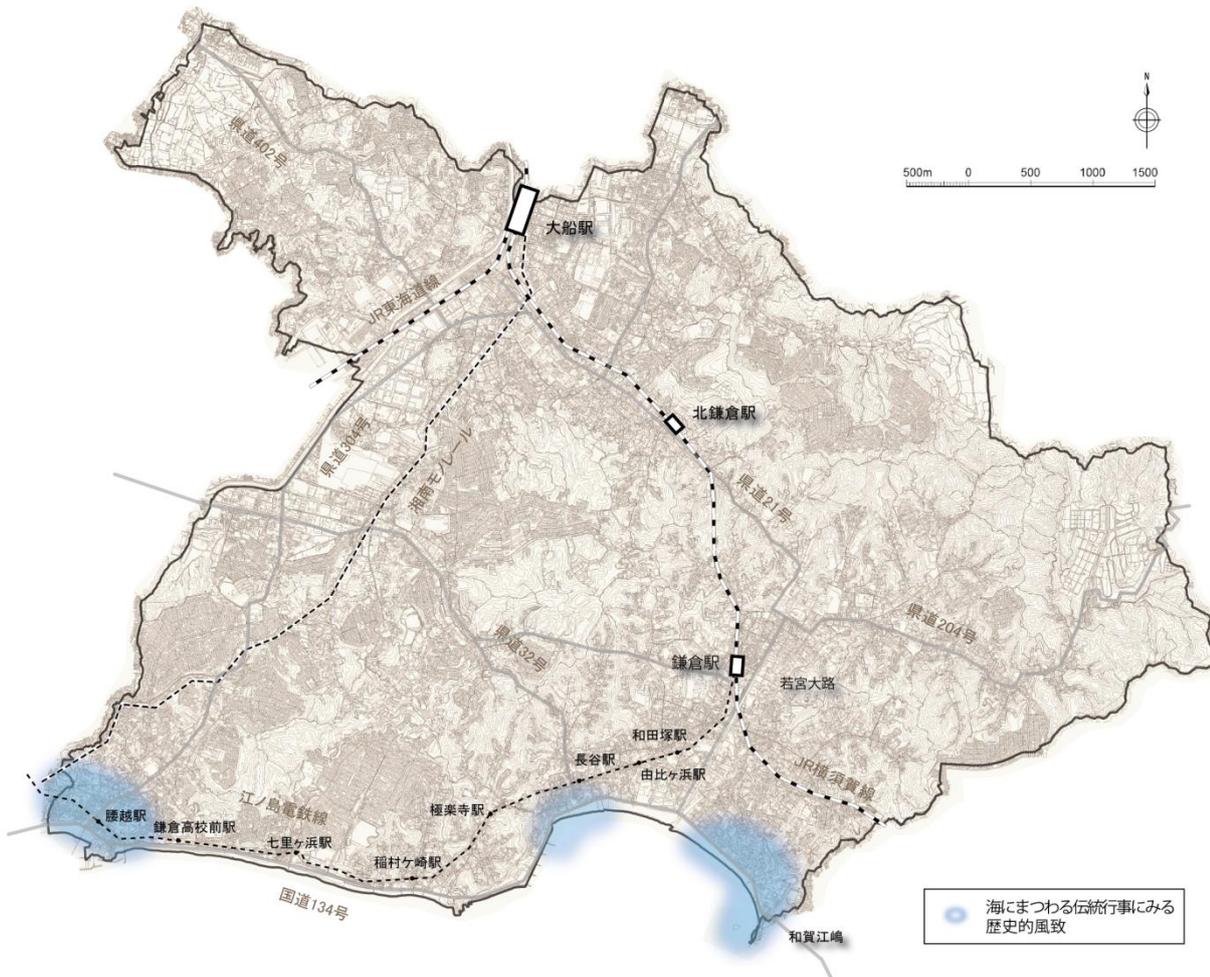


図2-12 海にまつわる伝統行事にみる歴史的風致の範囲

序章
第1章
第2章
第3章
第4章
第5章
第6章
第7章
附録